

第3回 ICTを活用した自立活動の効果的な指導の在り方検討会議 会議録

令和4年2月14日(月)10:00~12:00

兵庫県民会館1202会議室(オンライン参加有り)

1 開 会

- ・開会あいさつ

2 報告事項

○研究指定校より今年度の取組報告

- ・県立姫路聴覚特別支援学校
- ・県立豊岡聴覚特別支援学校

○事務局より

- ・京都宇治支援学校視察報告
- ・リーフレット作成について
- ・今年度の事業の取組について
- ・次年度に向けて

3 協議事項

テーマ「ICT を活用した自立活動の効果的な指導の在り方調査研究事業の成果と今後の課題について」

- 今年度は、コロナ禍のため、市内全部の小中学校の特別支援学級在籍の児童生徒が集まることが難しく、遠隔システムを活用し、自己紹介やゲームなどの交流を行った。このリーフレットの事例にもあるように、すごく緊張を伴う児童生徒が、リモートでは、直接対面するよりもリラックスして参加することができたという報告がいくつかあった。
- 家庭におけるICTの活用を考えていく上で、例えば、学校へ行きづらい児童生徒に、タブレットを貸し出した場合、家庭におけるネット環境の整備に課題があるケースがみられる。その部分をどう手当していくかについても考えていく必要がある。
- リーフレットの事例の中に自分用アプリを見つけたいという事例があるが、障害のある子どもにとって助けになるアプリも多い。ただ、使用の際の著作権や学習で使用するタブレットには、色々、制限がかかっているので障害特性に応じ、必要なアプリを選択や生活での活用を進める研究も必要ではないか。
- 今後、ICTを活用していく上で、タブレットの利用制限という課題はあるが、コロナ禍により、いろんな学校でこれまであったネットを使用する上での制限は、かなり弾力化されてきている。例えば、リモートでの遠隔システムの使用において以前は、ハードルが高かったが、今では、様々な場面で活用されるようになってきた。アプリのインストールに関しても同様に弾力化されていくのではないかと考える。
- 県教委による京都府立宇治支援学校視察訪問の遠隔システムでの事例は、興味深か

った。ぜひ、校長会でも行ってみたい。まず、管理職である私たちが実際に自分たちの意識を変えろというようにも含めて、視察に行くことも大事だと考える。

- ICTは、特別なニーズのある子どもたちにとって、本当に有効な手立ての一つだと感じてはいるが、なかなか重度のお子さんに対して使うのが難しいなというふうに教師たちは感じている。しかし、リモートを使った楽しさ、そこには児童生徒の自立活動のための授業があり、児童生徒自身の学ぶ意欲というところが、かき立てられて、いい成果が出ており、ICTの効果的な活用だと感じた。
- 教師側のほうが、ICTの活用についてどのように受け止めるのかを含め、実際の効果はどうだったのか、どのように子どもたちが変わっていったのかという部分をもう少し慎重に見ていき、今後の取組に生かしていく必要があると考える。
- 遠隔システムの活用は、ICTならではだと感じた。アプリを通して、あるいは録画したものを使って、専門家と子どもの状況を共有することは、子どもの支援・指導を考えていく上で有効だと感じた。今後、ICTの活用は、分析にも役立つと考えられる。また、距離を超えて指導の場が持てる、支援の場が持てる、そして、学びの補償ができる、これも素晴らしいことだと思う。
- 本事業に関して、今年度の取組を情報共有できることが必要だと考える。指定を受けた学校以外の県下にあるICT活用事例をまとめて、好事例を情報共有し、兵庫県のICTを活用した自立活動を進めていくきっかけになればと考える。また、他府県の先行事例等々についても、もっと知りたい。学校現場からも視察に行き、勉強する機会があればと考える。
- 知ることが大事だと思っている。情報を知って、それを要らないものは要らない、要るものは要るとし結果、自分のものにしていけばよいのではと考える。多くの豊富な情報が知りたい。得た情報を現場の教師に伝えていき、子どもへの適切な支援につながっていくことが大切だと思う。
- 本校は、知的障害を主とする学校だが、肢体不自由の子どもも在籍しており、肢体不自由という指定で研究を引き受けたが、他の肢体不自由の学校の様子も知りたい。いろんな学校の情報を知りたいと思う。
- 京都府立宇治支援学校の視察の報告の中で、体制がしっかりできているというような報告があったが、一人の子どもをいろんな専門家が集まって支援できるような、遠隔システム教育とか理学療法士、作業療法士、医師、また大学、先生等が集まることのできるような支援システムがあればと考える。
- リーフレットだが、本校は、視線入力システムに限らず、様々なICTの活用について取り組んでいるので様々な取組を周知できればと考える。
- リモートを活用した通級による指導において、相手校の協力なしでは学習も進みにくいという現状があると思う。
- リモートを使いながら、子どもに身に付けさせたい力をどうつけていくのかを考える機会になった。
- 例えば、養護教諭や教頭など担任以外の教員が、遠隔での通級による指導の時間に子どもの支援をする状況があることを踏まえ、教育委員会として学校に働きかけていく必要性を感じる。

- それぞれの障害に応じたICTの効果的な活用方法などを保護者としても知ることができ、大変に勉強になった。自分の子どもは重度の知的障害があるが、はじめは、重度の知的障害のある子どもがICTをうまく活用できるのだろうかと感じていたが、この会議で障害のある子どもたちの ICT の活用を知り、自分の子どもにも ICT をどう活用していくか、自分としては楽しみにしている。
- コロナ禍も影響して、保護者同士の情報の交換というのが今、できておらず、ICTと言えば、動画を見ていることと思っている保護者も多いのではないと思う。このように先生方もこれだけいろいろ考えて取り組んでくれているので、保護者としても何か、取り組めることはないかと感じた。
- 重度の障害のある子どもの場合、保護者の支援がないとICTの使用も難しい。保護者向けの情報があれば、家庭でのICTの活用が広まっていくと考える。
- 障害の状態は、本当に一人一人違うので、ICT の活用を進める上でもどうすればこうなるみたいなことがなかなかわかりにくい。活用をしていく上で個人の ICT 知識や技能による差が大きい。
- 保護者というのは、少しでも自分の子どもに力をつけたい、可能性を広げたいと願っている。学校において、もう少し知的障害のある子どもへのICT活用の取組発表をする機会があったり、保護者が家庭でのICT活用を学べる機会があればいいと考える。
- これまでの検討会議の総括にもあった「自閉症の僕が飛び跳ねる理由」の著者である東田直樹さんに講演会等で出会ったことがあるが、本当に外から見える状態とその人の行動と知性には、あまり関係がないのではないかということを経験した。
- 運動能力に問題があり、重度の知的障害の人というのはICTを使って自分の気持ちを表現できたり、勉強をすることがなかなか難しい。パソコンもいいとは思いますが、もっとアナログ的な、文字盤的な、そういうものから始めるのも必要だと考える。もう少し、アナログ的なところも取り入れながら、その子に応じた教育というのを進めていってほしいと思う。
- ICTをとにかく使おうではなくて、道具としていかに使っていったらいいのか。どういうときに適しているのかということにこの一年の検討会議の中で一つの方向性としてまとまってきたように思う。
- 一人一人の子どもを見たときに、様々な障害とその程度があり、そして、年齢や障害への理解、それから、一人一人が置かれている精神状態等も踏まえ、考えていくことが活用していく上で重要だとわかった。
- 一人一人の子どもに対しての指導目標をしっかりとった中で、ICTを使うことが本当に適切なことなのか。どのように使うことによって効果的には使えないのか。そして、どう使えば目標を達成するのかということを常に考えていかないといけない。
- ICTを道具としてではなくて、どういうケースでどういうふうに使っていけばいいのかということを考え、知って、そして経験を積むことが我々の現場の力になると感じている。
- ICTかアナログかという議論が先行しがちになるが、一番大事なところは自立活動である。この自立活動をアップデートしないと、ICTは生きてこない。やっぱり、自立活動

を実現するために最適な手段を選ぶということを忘れてはいけないと考える。

- リーフレットの中で一番大事なことは青字で書かれている「行きたい」、「盛り上がりた
い」、「見つけたい」、「友達になりたい」、「受けたい」と子どもの気持ちを代弁してい
ただいている、ここが一番重要になってくる。自立活動は主体的なことが大前提である。
主体的であるという意味において、やっぱり本人の意思というところが重要になって
くる。今後は、そのブラッシュアップを1年間、通してやっていかないといけないと感
じている。その手段として、ICTがあると捉えている。

総括

- ICTを使うのは子どもたちだけではないが、今までICTを活用できなかった子どもた
ちが活用していくということについても、広げていかなければならない。
- 私たち、教育界というのは、元々は最先端の機器とか、最先端の技術を結構導入して
きた。ところが、私が教員になった40年ぐらい前から最先端の機器が学校教育の中
になかなか入りにくくなってきているところがある。40年前にはもう、パソコンもあっ
た。ところが、パソコン等のICTの導入が、今までほとんど本格的にされることがなか
った。この40年間でかなり止まってしまった部分があるのではないだろうか。子ども
たちの教育において、ICT機器を使うことに後ろ向きになってしまったところがある。
- 今まで停滞していたものを新しく入れることによって、子どもたちの視点で生き生き
できるようなものにしていきたい。例えば、ユーチューブで動画を見るということでも
いいと考える。子どもが、自分が好きだと思うようなユーチューブの画面を見て、それ
を自分が選択して見ていくということでもいいと思う。この子たちが学校を卒業した
後、生活の質を考えていくときに、このような力は、とても重要になってくる。私たち
は好きなことをしているのに、障害のある子たちは好きなことを自分でできない状態
にさせてしまうことはよくない。最低限、子どもたちが自分の好きなことができるよう
な状態にまずは、させてあげたいと考える。ギガスクール構想を始め、ICTの基礎的な
環境が出来てきたことをもっと活かしていきたい。
- 県では、ネットワークということ 키워ドにしているが、ICT機器はネットワークだ
けではない。ただ、ネットワークをうまく活用することによって、子どもの学習の質が
変わると考える。
- 様々なところで事前学習としてICTを活用することが考えられる。例えば、交流や共
同学習の事前学習において、今までは事前にビデオを撮ったりとか、先生側からデー
タを送る等の形でやっていたのが、ICTを活用してリアルタイムでやりとりができる。
- 今までは、多くの人たちの前に出ると、なかなか緊張して話ができなかった子どもが、
リモートであれば話ができるとか、リモートがうまくいかなかったら事前に録画したデー
タで代替えすることや、それも難しい場合は、絵カードでコミュニケーションを取る
とか、その子に応じた様々な方法を先生方も考えていくことが可能となる。選択肢を
増やして考えていくことによって、子どもにあったコミュニケーション手段というもの
がはっきりとしてくると考える。
- 自立活動という観点で考えると、私たちは生活している中で、まず自分の姿が見えな

いので、鏡を見る。鏡を見ることによって、顔をちゃんと洗えているか等を含めていろいろ考える。リモートで、画面を通して相手がどう自分を見ているのかということが初めて、見るようになった。今までは、私たちが見るのは鏡の世界が普通だった。ところが、相手の方々からどう見られているのかというのは、この遠隔システム等を経験することによって、初めて実感として私たちが感じるようになってきた。

- 相手の立場になって考えるというのは、なかなか私たちも苦手なところがある。特に、自閉症の子供たちにとっては、なかなか相手の立場になって考えるというのは難しい。しかし、ICTを使用することで様々な視点が加わり、相手の立場についても少し意識していくことにつながっていると考える。自分が見えている世界だけではなく、客観的に見られた世界を体験することによって、自分の行動とか、自分の動作等について、自分自身で修正していくきっかけになっていくと思う。まずは、身近なICT機器で簡単な機能から始めていただければと考える。